

近代日本と中国の一接点

—大陸浪人、大アジア主義と中国の関係を中心として—

趙 軍

一、大陸浪人—近代日本の私的な対外活動の担い手たちの諸様相—

(1) 大陸浪人とは

20世紀の始めに中国で起こった辛亥革命は、二千年余り続いてきた封建制度をくつがえして、この老大帝国の政治的基盤を揺り動かし、アジア全体ひいては世界中に反響を呼んだ嵐であった。この時代の嵐の中で、日本人によって形成された異色の人々が活躍していた。いわゆる「大陸浪人（支那浪人ともいう）」である。彼らはその数は多くはないが、そのエネルギーは決して小さくなく、また外国人としての彼らの、中国に対する関心の強さは尋常ではなかった。政治・経済・文化・外交などの各分野において、中国のブルジョア革命運動に深く介入していた彼らは、辛亥革命の歴史の上に多くの痕跡を残したのである。

中国の過去の民衆闘争や易姓革命と違って、辛亥革命は国際的な意義を持っていた革命運動であった。革命運動の当時でも、革命家たちは外国といろいろなつながりを持っていたし、また、革命運動の勃発によって、アジア諸国ひいては世界諸国に対しても多大な衝撃や影響を与えた。逆に言えば、この国際的意味を持った革命運動に対して、各国も絶えず目を向けて、自国に有利な方向へ誘導しようと試みたのであり、特に大陸浪人などを通して深く関与した日本の動きは、辛亥革命運動史の上で、非常に重要な一ページなのである。

大陸浪人は、現在の中国人の目から見ると、かなり悪い存在である。中国には大陸浪人や支那浪人とは呼ばないが、「浪人」や「日本浪人」と呼んできた連中がいた。歴史に関する小説とか映画や演劇とかに、日本浪人はたびたび登場しており、いずれも「日本帝国主義の手先」、「スパイ」、「戦争屋さん」などの姿で現れているのである。研究者の中にも、ほとんどの大陸浪人のことを日本帝国主義の中国侵略の手先や先兵と見なしている人は多い。

ところが、時代をさかのぼると、大陸浪人に対する中国でのイメージはそれほど悪いものではなかった。特に辛亥革命の前後において、彼らはまだ「日本の志士」や「友人」と呼ばれて、弱体的・孤獨的なブルジョア革命派の人々に得難い友達として親しまれてきた。例えば、革命指導者の孫文はその名著の一つである『建国方略』の中に、次のように述べている。

「日本に着くと、民党（自由民権運動の流れを汲む反藩閥諸党のことを指す）の領袖、犬養毅が宮崎寅藏と平山周の二人を横浜まで出迎えさせ、かれらの案内で東京に行き、犬養と会った。一回の会見で旧知のごとく、天下のことを歓談して、甚だ痛快であった。当時、日本の民党ははじめて政權を握り、大隈（重信）が外相であった。犬養はその画策にあたり、かれを動かすことができた。のちに犬養の紹介で一度、大隈、大石（正巳）、尾崎（行雄）らと会ったことがある。これは予の日本の政界の人物との交際のはじまりであった。ついで、副島種臣や在野の志士、頭山（満）、平岡（浩太郎）、秋山（定輔）、中野（徳次郎）、鈴木（久五郎）らと識り、後には、安川（敬一郎）、犬塚（信太郎）、久原（房之助）らと識った。これらの志士は、中国の革命事業に対して、前後して資金援助をしてくれたが、その最もたる者は、久原、犬塚であった。革命に奔走して終始怠らなかつた者は、山田兄弟（良政、純三郎）、宮崎兄弟（弥蔵、寅蔵）、菊池（良一）、萱野（長知）らであった。革命に尽力してくれた人に、副島（義一）、

寺尾（亨）両博士がいた。ここに、予と直接、接触のあった人々について略記し、記憶にとどめる次第である。その他、間接に中国革命党のために奔走し、尽力した人々は多くあり、その全部をここにいちいち記すわけにはいかぬので、後日の革命党史に譲ることとしたい。」⁽¹⁾

この中に名前を挙げられた人々の大部分は大陸浪人及び大陸浪人の関係者で、評判もよかったのである。

また、革命党の歴史編纂者である馮自由も「興中会初期孫總理之友好及同志」と「興中会時期之革命同志」の両文の中に菅原伝・宮崎虎（寅）蔵・平山周・田野橋次・甲斐靖・曾根俊虎など27名の「日本志士」の名前を挙げて、それぞれの活動や生涯について紹介と評価を加えている。たとえば、宮崎寅蔵については、「我が国の革命事業を賛助した日本志士の中で、この人は最も努力した」と述べ⁽²⁾、犬養毅については、「日本進歩党のリーダーであり、宮崎の紹介によって、孫（文）総理と知り合いになり、今まで我が国の革命党人の日本での活動を大いに助力していた」と述べた⁽³⁾。また頭山満についても、「日本黒竜会のリーダーであり、在野の浪人のリーダーでもあり、中国革命党人の日本での活動に常に助力した」と述べている⁽⁴⁾。

辛亥革命前後の中国ブルジョア革命派が、大陸浪人とその活動に対し好意的に評価したことは、この程度の資料によっても十分に分かるはずである。しかしその後、中国人の胸中における大陸浪人のイメージが崩壊するのは、なんらかの歴史的な理由があったためと思われる。その理由の探すことは中国人にとっても日本人にとっても興味深い仕事だろうと思う。

それでは、大陸浪人とはいったいいかなるものであろうか。

中国の歴史には浪人のようなものがなかったので、中国人にとって、大陸浪人を理解することはちょっと厄介な仕事である。日本史の上では、浪人とはおよそ中世以後の日本で、主家を離れたり、失ったりした武士を指す言葉である。大陸浪人とか、支那浪人とか言うときには、その内包は実際に大きな相違があり、日本史だけの所産ではなくて、中国史との間にも深い関係を持っていたものである。

先ず、高柳光寿、竹内理三両氏の編集した『日本史辞典』の「大陸浪人」についての説明を見よう⁽⁵⁾。

大陸浪人 戦前、日本帝国主義によるアジア侵略の先兵として活躍した特定の政治家たち。平岡浩太郎・頭山満らが1881（明治14）玄洋社を結成、以後同社社員や1901結成の黒竜会のグループらが中国大陸や朝鮮を舞台として活動、日清・日露戦争には密偵や現地工作員として情報収集・地勢調査に当たった。彼らは常に軍部や政治家・財閥などと密接に連携し、その資金援助を受けて現地の政・財界に食い込み、政治工作や利権獲得にも暗躍、日本の侵略政策の露払い役を使命とした。一方、宮崎滔天（寅蔵）や北一輝のように中国革命に身を投ずるものもあった。昭和時代には、軍部に密着し中国での軍事行動推進の手先として活動、また日本で生活できないゴロツキ政治家や一攫千金を夢みる野心家らが大陸浪人と自称、大言壮語と国土風を装い、日本人の特権を利用しての利権あさりや詐偽的商行為を行うなど、アジア各地で犯罪的行動をほしきままにした。

ここには、大陸浪人を「戦前、日本帝国主義によるアジア侵略の先兵として活躍した特定の政治家たち」と見て、大陸浪人を政治家などを見なした定義だと言える。ほかには、大陸浪人を民間人として見なした定義もあるようである。例えば、岡部牧夫が『日本大百科全書』の「大陸浪人」の条目の下に次のように述べている⁽⁶⁾。

大陸浪人 日本のアジア政策の一翼を担う自負のもとに、中国、朝鮮などに居住、放浪した民間の国家主義者、大アジア主義者の俗称。支那浪人とも言った。……

政治家と民間人のどちらの定義が適当であろうか、簡単に結論を下すことは難しい。ただ、一般的に言えば、多くの大陸浪人はだいたい武士家庭の出身で、職業もなく、正常な生計の道もない浮浪人であった。彼

らの中で政府の高官や政界の大立者になった人はごく僅かであって、この意味においては「民間人」と見る定義は具体的かつ明快で、合理的であると思われる。しかし、全体的に見れば、大陸浪人はただ浮浪人ばかりではなく山座円次郎・平岡浩太郎・大石正巳・的野半介などのような、かつて政府・議会に重要な足跡を残した人達もいた。彼らも以前から習慣的に大陸浪人と見られてきたのである。こう考えると、大陸浪人を簡単に「民間人」を以って限定することは、適当ではないことになるかも知れない。ゆえに、本稿では「民間人」の範囲をやや拡大して、大陸浪人については、「大陸浪人 支那浪人ともいう。日本近代史の上でいわゆる『大陸経営』に志した民間人および一部の政治家・軍人の総称、その大部分は国権主義・拡張主義者で、日本帝国主義のアジア侵略の先兵、別働隊であった」という定義を下すことを提案したいのである。

大陸浪人は近代日本の社会で中国とさまざまな関係を持っていた人々から成る集団であって、複雑な集合体でもあった。大陸浪人を玄洋社系と軍部系との二つのグループに分ける意見もあるが、これはたぶん組織の面に着目した分類であろう。活動の様式から見ると、大陸浪人は次のような類型に分けられると思う。

1、明治11(1878)年上海に渡って、楽善堂分店を設け、目薬・雑貨の販売や出版などの営業によって中国人と広く交遊した岸田吟香や、漢口楽善堂支店を開き、中国内地の情報を収集し、その後上海で日清貿易研究所を創立して、一群の経済活動を行った人材を育成した荒尾精や、荒尾と一緒に日清貿易研究所を営営して、後に東亜同文書院の創始者になった、根津一のような人々である。彼らは大陸浪人の中で経済、教育を中心として中国での活動分野を広げようとした先駆的人物であった。

2、孫文をはじめとする中国ブルジョア革命派の人々が日本に亡命してきてから、彼らの周辺に大勢の大陸浪人が集まった。玄洋社の中核である頭山満や平岡浩太郎、黒竜会のリーダーの内田良平、のちに惠州の蜂起で戦死した山田良政、そして孫文と親交のあった宮崎滔天や平山周・萱野長知らは、その中の最も知られた人物である。言わば革命党の周辺で活動した人物たちである。

3、『日本改造法案大綱』を書いて「二・二六事件」の陸軍将校の思想的指導者と尊ばれた北一輝は、辛亥革命の前後には「湖南派」革命党人と親密につきあった大陸浪人の一人であった。いわゆるしばらく革命党と関係を持ち、まもなく日本国内問題に戻った、一時的に革命に関与した人物である。

4、武昌蜂起後に宗社党の清朝政府の元大臣らと結託して、「満蒙独立運動」と清朝政府の復活を図ろうとした川島浪速、佃信夫らは、反対の方面から革命運動とつながりを持っていた大陸浪人である。孫文らとは直接的な関係をほとんど持っていなかったにしても、辛亥革命史の上で見のがすことのできない人物である。

5、上述した「志士」型の大陸浪人のほかに、中国民間の流賊的な兵隊である「馬賊」や「胡匪」の中に紛れ込んだ、伝説的な人物もあった。伊達順之助や薄益三、小日向白朗らのように「馬賊」、「胡匪」のなかに溶け込んだ大陸浪人である。

大陸浪人の総数はどのぐらいいるのか？具体的な統計がないので、簡単な推算をするより他ない。1930年に出版された『東亜先覚志士記伝』下巻の列伝の部には、1,018名の「東亜先覚志士」の伝記を載せているが、その人物の大半は大陸浪人と見なすことができるようである。同年にまとめられた『対支回顧録』の下巻にも832名の「対支功労者」の伝記が並べられている。人数はやや少ないが、そこに挙げられた人物は『東亜先覚志士記伝』の場合とほぼ同じで、みな1936年以前に死んだ大陸浪人および中国問題と関係ある人物ばかりである。1942年に、東亜同文会はまた『続対支回顧録』を出版したが、その下巻の伝記部分には、当時まだ生きていた人、或いは『対支回顧録』に漏れられた人、合わせて213名の「対支功労者」の伝記を載せている。前のものと合算すると、1,045名になる。

なお、1933年2月に黒竜会の提唱によって作られた「満洲問題挙国一致各派連合会」は日比谷公園で「東亜問題先覚志士慰霊祭」を行った。その会場には、1,454柱の「東亜先覚志士」の位牌が供えられたという。

三種の資料の人数にやや出入があるようだが、その中に含まれている東郷平八郎や大久保利通のような、明らかに大陸浪人とは言えない人を除外すれば、千人ぐらいになるだろうと思う。その残った千人がおおよそ明治30年代から、昭和10年代までの間に中国大陸や日本国内で活躍した大陸浪人の概数だといえよう。

大陸浪人は、国会議員や達官貴人から遊民や坊主、娼妓まで色々な人々によって雑然と構成されてい

た。『東亜先覚志士記伝』下巻の列伝部分の紹介によれば、記載された1,018名の人物の内、20名の朝鮮人を除いて、残りの998人の職業別あるいは所属別の人数及びその％は次の通りである。

職 業 ま た は 所 属	人 数	パーセント％
国会議員、役人、貴族など	167	16.7
学者、芸術家など	33	3.3
新聞、出版関係者	92	9.2
経済関係者（「満鉄」、拓植会社関係者などを含む）	66	6.6
玄洋社、黒竜会、東亜同文会メンバー及び浪人会など団体の参加者、関係者	367	36.8
現役軍人	149	14.9
軍事探偵、軍隊随行通訳及び「特別行動班」メンバー	152	15.2
坊主、回教徒など宗教関係者	22	2.2

※一人が二カ所以上に重複した場合もあるが、パーセンテージの分母は998人である。

この表から、次のようなことが分かるであろう。即ち、第一に、国会議員・貴族・政府役人・学者・芸術家などの人物が、「東亜先覚志士」全体の約五分の一に相当する二百人もいる。その中の一部は大陸浪人と見なすことが無理であろうが、それにしても「上流社会」が大陸浪人全体の中でどれほど重要な存在であるかを窺わせる。第二に、現役軍人や軍事探偵や軍隊随行通訳及び「特別行動班」のメンバーなど、直接に侵略戦争に奉仕したものには、全体の30.2%の301名がいる。そのほか、漢口樂善堂支店に集まった人々と日清貿易研究所・東亜同文学院の卒業生の大部分、および個人的身分で中国各地で「巡錫」した僧侶・教徒たちも日清戦争・日露戦争の前後にいろいろな情報を収集することに力を尽くして、間接的に政府・軍部の「対支策」に助力している。この点から考えると、大陸浪人の大部分は日本帝国主義のアジア侵略の先兵だといっても過言ではないだろうと思う。

上述の各種類の人物をパーセンテージの順に並べれば、占める比率が一番高いのは玄洋社など大陸浪人団体のメンバーや関係者であり、その次には役人や議員などの政治関係の人々、三番目は軍事探偵・通訳・「特別行動班」のグループ、四番目が現役軍人である。大陸浪人たちがいろいろな活動を行う時に表れる三つの特徴、即ち、団体を結成して集団活動の手段を取ることが多いこと、陰に政府や各官庁・政党と常に密接な関係を保っていること、軍部との間にも協力関係を持つことが多いことは、この割合の反映ではないかと思われる。辛亥革命前後に中国で活躍した大陸浪人は多かれ少なかれ大体このような特徴を帯びていたと言ってもよいであろう。

（2）大陸浪人の社会的心理

大陸浪人といわれる人々は玉石混淆のような存在であるにも関わらず、個人としての大陸浪人の一人ひとりを社会的心理の面からみれば、彼らはやはり次のようないくつかの共通点を持っているのである。これこそ、大陸浪人の心理的な特徴だと言えよう。

1、いわゆる「在野の民間的意識」と、権威的な存在に対する反撥心理。この点については、玄洋社・黒

竜会系の大陸浪人、つまり「不平士族」出身の浪人たちの行動はもっとも顕著であった。

玄洋社・黒竜会系の大陸浪人はほとんどが、九州の武士家庭の子弟であって、特にその中堅となるメンバーは、だいたい元福岡藩士の出身である。明治維新の頃、各地を転戦して、戦功を立てた福岡藩士も結構いたといわれるが、維新政権ができてからは、薩・長藩閥の独擅場になってしまった。不満を抱いていた福岡士族は恨みを晴らすため、団体を作って、政治を非難したり、藩閥を糾弾して、機会があれば、反乱さえも辞さなかった。「在野」の地位に置かれて、政府の悪政を排撃することを自任した「不平士族」は、このような反撥的な風土で育てられたものである。玄洋社と黒竜会はまさにこういう人物たちの淵藪であった。生涯「在野」の身分を守ってきた頭山満・内田良平にしても、政界に籍を置きながら政府とめったに協力しない平岡浩太郎・的野半介にしても、みな「不平士族」の代表者であった。大陸浪人が往々にして純然たる「民間人」から成る団体と考えられたのは、たぶんこれらのせいであろうと思われる。

ところが、ここで指摘しなければならないのは、このような役人になりたくない「在野」精神そのものが、ある特定の歴史的条件によって形成されたものであり、政府に受け込まれず、志を遂げられないがゆえに取った政治的なポーズであったことである。金や地位で迷わされず、権貴に絶対に諂わないような信念からでたものではないのである。したがって、歴史的条件が一旦変わると、彼らはやはりある程度は政府や軍隊と協力して、五斗の米のために他人に頭を下げるになるわけである。辛亥革命の時期における内田良平の一連の活動は、すでにそのことを裏付けていた。

2、誇り高い言葉を放ったり、豪放雄大な気概を示して威張ったりする「国士風」という虚栄心。

時代が変わり、自分達はすでに封建時代の武士ではなくなったことを知りながら、ほとんどの大陸浪人たちは、あえて「武士道」を行動の基準と見なし、吉田松陰・高杉晋作・坂本龍馬・西郷隆盛などの昔の武士たちを模範とし、世を矯正することをもって自任して、大言壮語・豪放不羈の如き「国士風」を苦心して追求していたのである。

「天地を吞吐すこの肚と

理勢を喝破すこの心眼

全腸鉄軀伊達にや持たぬ

権勢富貴がなにもぞ

糞ッ 压制迫害がなんだ

我徒は天下の弱者のために

不義の輩をバラさん為に

鉄軀を堵つての一六勝負

……

我徒は四百余州を足場に

東洋平和の急所を抑えて

起つたる以上は天下縦横

馬賊回々海賊狼匪も

一つにまとめて我徒がひきいて

碧眼茶毛の荒胆挫いて

浪人天下の切味見せる

天下の決心

どこでもゆくぞ

じゃま立てするならいつでもしてみろ

……」⁽⁷⁾。

この「浪人天下」という唄は鈍牛庵覇鎚の作ったものといわれ、大陸浪人たちの豪放にして勝手放題な振る舞いを生き生きとして浮き彫りにしている。世を匡正することを以って自任する「国士風」の真似は、当時にかなり一時盛んになっていたようである。

3、体系的な思想に乏しく、常に激情や義侠心や冒険心理などのようなものに駆られて活動する情熱家的心理。

中国のブルジョア革命家と違って、大陸浪人たちは自分の思想と行動を導いている体系的で深い理論（例えば民族主義や民主主義）を持っていなかった。思想の面では、彼らは貧弱であった。「大陸経営」や「大アジア主義」などの共通の観点を持っていながら、その内容に対する認識は一致しておらず、その認識の深さも様々であった。ある者は朦朧とした「大アジア主義」のような信念によって奮起し、ある者は東アジアに対する危機感や責任感によって勇気を奮い起こし、また上役の命令或いは個人的な私欲によって中国に入り込んでいる者もずいぶんいたのである。彼らを駆使していた原動力は、概ね激情や義侠心或いは冒険心理などのようなごく感情的なものであった。

明治の末から大正始めにかけて、池田亀鑑の作詩（宮崎寅蔵の作詩という人もある）といわれた「馬賊の唄」はたいへん人気があったと言う。

「俺も行くから君もこい
せまい日本にや住みあいた
波たつ彼方に支那がある
支那にや四億の民が待つ」⁽⁸⁾

この唄は、当時若者の中国大陸に対するいろいろな美しい夢や幻想を掻き立てたという。また、孫文の下で参謀長格になったことがあると言われる冒険小説家の山中峰太郎は『少年倶楽部』という人気雑誌の紙面で、「日東の剣俠児」や「大東の鉄人」、「亜細亜の曙」などの実録風武俠小説をたくさん書いた。彼の手で作られた本郷義昭など、フィクションの大陸浪人は、日本少年の理想像となって、「大陸雄飛」の夢をあおり立てた。その上、花田仲之助を始めとする「満洲義軍」と、青木宣純の率いた「特別行動班」の中国で取った「神奇的功績」が世の中に広く宣伝され、大陸浪人の神話を真実のように思わせる効果があった。若者たちは「支那」や「満洲」などの言葉を聞くと、忽ち熱血が溢れて、先を争って中国大陸へやって行った。しかし、まもなく戦場の露と消えた人も少なくなかったのである。こういう人々が大陸浪人の主力軍のようなものなので、大陸浪人にはよくこのような激情的な集団の面も見えるわけである。

4、所期の目的や理想のために、手段を選ばず、成敗や失敗にこだわらない、一筋で押し通そうとしたやり方及びいわゆる「献身精神」。

大陸浪人は一つの整然とした団体ではなく、中国のブルジョア革命派より遥かに散漫な人々の集まりなので、統一的な綱領や規律はもちろん、ほぼ共通な手段や方法さえも持っていなかった。論文や著作や演説を通じて、世論を煽動することに長ずる人もあり、異国の地で単身で情報を集めることに長ずる人もあり、中国革命党の活動に参加した人もあり、また清朝政府の元大臣や王侯と連合して封建王朝を復活しようとした人もあった。確かに多様な有りさまであった。

冒険性と投機性の強いことを行っているのも、冒険意欲や投機的心理のようなものが次第に大陸浪人たちの持ち物になったのである。その中には、家庭や親族を投げ捨て、いろいろな困難の中で、立つ瀬がないところに追い込まれても意志を変えない人もずいぶんいた。例えば、「支那内地探検の先達」と称えられた中西正樹という人は、外務省派遣留学生として横浜から中国への出発直前、故郷の生活を支えることのできぬ養父・妻・息子および妻の妹などの親族が静岡から彼の元に身を寄せてきた。中西は一家の事情のために多年待っていた渡華の機会を失いたくないので、家族を置き去りにして予定通りに旅立った。その後、彼の祖母と養父と妻が相次いで世を去ったが、彼自身は人のいないところで涙を流しながら、「業成るまでは断じて帰

朝せぬ」との意気込みで中国での学業を引き続き頑張ったのである。三年の修習が満了した後、中西は自分の力で、風餐露宿、乞食しながら直隸（現在の河北省）・河南・陝西・四川・貴州・雲南・湖南・湖北・山東など中国の各地を踏査した。ビルマと境を接している雲南省の騰越の土地にも、彼の足跡が残っている。かなり強い犠牲的精神の持ち主であった⁽⁹⁾。

中西正樹と共に「支那探検」の「兩大関」の一人として称えられた小越平陸も南船北馬、中国の各地を放浪して渡り歩いた冒険家である。彼は「三たび三峡の險を遡り、四川・雲南・貴州等を窮め、三たび長安・洛陽の古都を訪ひ、更に長白山の辺は幾回も探検し」、「……爾来大陸に於ける探検の旅を重ねて、支那全領域中、新疆・広西の二省を除く外は、その足跡を印せざるの地なく、最初支那に入ってから前後三十余年を支那内地の探検に費し、その経過するところの道程は実に二十余万清里に及んだ」⁽¹⁰⁾。

つぶさに辛酸をなめて、多くの犠牲を払って尽くしているのではあるが、自分の事業に成功の見込みがあるかどうかについては、大陸浪人たちはさっぱり分からないという状態なのである。川島浪速はある詩の中に次のように詠じている。

「荒山破駅寒煙微。栖鳥啾々向晚飛。秋原凋萎霜華重。原上群馬何不肥。茅檐蕭條客独坐。柴門寂寞人敲稀。酒肉近来不入口。野蔬山芋且療飢。夜深孤衾冷如水。淒月一痕光入扉。魑魅襲夢遂難去。覺來枕頭妖霧霏。……人生休論窮通事。苦樂何必名利羈。寄言吾党二三子。不須衣錦鄉里歸。」⁽¹¹⁾

これこそ、「国士風」で表面を飾っている大陸浪人たちの衷情だろうと思う。

上述のような心理的特徴は、大陸浪人同士を相互に結びつける架け橋であった。もちろん、中国革命派の中にもこのような特徴や政策を帯びていた人があるけれども、そんな広く流行していたものではなかった。大陸浪人と比べれば、彼らはむしろ組織的な集団である。したがって、このような心理的特徴が大陸浪人と中国ブルジョア革命運動及び中国革命党との間の架け橋（少なくとも主な架け橋）ではなかったことは明らかである。大陸浪人にとって、大陸浪人らしい心理的特徴は自己の存在を支えるつかい棒であって、「大アジア主義」のような政治的理念こそ、中国革命への架け橋であった。このような大陸浪人と中国革命の関係も、「大アジア主義」の変遷に伴って変わってきたのであり、彼らを中国革命へ導いたのは、「大アジア主義」であった。そこで、次には「大アジア主義」がいかなるものなのかを考察してみることとする。

二、一世風靡した大アジア主義 —その論理と特徴—

（1）大アジア主義とは

中国近代史の中で、大アジア主義（中国語で「亜洲主義」・「大亜洲主義」・「大亜細亜主義」と言う）とは、大陸浪人と同じように、とても薄暗くて無気味なイメージを帯びた言葉であった。代表的な例を挙げれば、中国共産党の創立者の一人として知られている急進派知識人李大釗の論文がある。

1918年7月、「Pan……ism 之失敗與 Democracy 之勝利」という論文の中で、李大釗は、「Pan……ism は、『大……主義』と訳す。この主義を持つ者は自分の欲望を求めるため、横暴な勢力を以って人を押さえ、自分の足元に屈服させることをも惜しまない」、「従って、『大……主義』とは専制主義の隠語なり」と言っている。彼はまた政治論理の面では、「大……主義」のような主張は他人の権利を犯すものであるので、民主・平権（権力平等）思想の大敵であると分析し、第一次世界大戦以来、民主主義が世界中で長足の発展を遂げられたのは、まさに「Democracy」の勝利と「Pan……ism」の失敗の結果だと断言している。

翌年の2月、李大釗はまた『国民雑誌』で「大亜細亜主義與新亜細亜主義」という論文を発表して、もっぱら大アジア主義に対して鋭い批判を加えた。この論文には、大アジア主義の内容とその性格について、次

のような分析を展開している。

「第一に、『大亜細亜主義』とは、中国併呑主義の隠語であることを心得ていなければならぬ。中国の運命が列強の勢力の均衡によって左右されていることはすでに言うをはばからない。日本が中国を独占しようと思えば、先にこの均勢を取り除けなければならない。思案の末案出したこの言葉は表面ではただ同文同種のような親善の話ばかりなのに、その裏には実際独りで中国を併呑しようとする意味が潜められているのである」。

「第二に、『大亜細亜主義』とは、大日本主義の別称であることを心得ていなければならぬ。即ち日本人はアジアモンロー主義の話を以って、欧米諸国のアジアにおける勢力の拡張を断り、アジアにおける諸民族をして日本人の指図に従わせて、アジアの問題を日本人の手で解決させて、日本がアジアの盟主になって、アジアを日本人の舞台となるようにしようとする主張である」⁽¹²⁾。

李大釗の分析は主に政治的性格の面について展開したものである。その当時の歴史も、その後の歴史も、みな彼の分析の正しいことをはっきりと裏付けていたので、「大亜細亜主義＝中国併呑主義」、「大亜細亜主義＝大日本主義」のような見方は、当然中国人の大アジア主義に対する最も一般的な認識になったわけである。

しかし、大アジア主義に対しては、歴史的な事情で大体の中国人はみな自分の体験や見聞に基づいて理解してきたので、学問的研究がかえって乏しく、特に思想史の角度或いはその歴史的 성격の変遷の面から、大アジア主義を分析しようとした人はほとんどなかった。解放後、中日両国の関係が冷戦から国交回復へ移行するにつれて、中日関係史の研究は中国の研究者の中でだんだん盛んになり、いろいろな成果も上げられたが、大アジア主義の如き歴史的遺物は依然として大陸政策の類と同一視されていて、全面的な批判を浴びている。孫文を研究する場合でも、彼の大アジア主義との関係、特にあの名高い「大亞洲主義」（実際、当時の演題は「大亜細亜問題」であった）の演説などの問題は意識的また無意識的に回避されてきた。要するに、大アジア主義そのもの及びその中国近代史における位置や影響などの問題は、今になっても研究不十分なもののなのである。しかし、それはやはり研究に値する課題なのでもある。

それでは、大アジア主義とは、いったいいかなるものなのであろうか？

大アジア主義は、日本では時にはアジア主義とも呼ばれ、英語で Pan-Asiaism という表現で表わされ、パン・アジア主義の別称もあった。

中国近代史の上でも、大アジア主義の主張と似よかった議論があったかも知れないが、孫文を除いて、自分の見方を公然と大アジア主義と称した人はほとんどなかった。もちろん、日本でも少なくとも明治末までは、大アジア主義という言い方はまだ存在していなかったが、その時には、日清提携論や興亜論などの大アジア主義式の主張がすでに盛んになっており、思潮として社会に影響を及ぼすほどになっていた。大アジア主義という名称はたぶん大正の頃出来たもので、その後大アジア主義は日本近代史における特異な思潮としてアジアの国々の人の知るところとなった。

さまざまな名前を持っているがそれを象徴しているのであろうが、大アジア主義がいったいいかなる内包を持っているのかについては、いろいろな意見が存在し、今日になってもまだ一致した見解が得られていないのである。今までの議論をまとめてみると、大体次の両論にまとめられるであろう。その一は、アジア主義を「戦前のアジア諸民族解放を掲げた共同体理論で、日本帝国主義の侵略政策を理論づける主張」⁽¹³⁾、或いは「欧米列強のアジア侵略に対抗するために、アジア諸民族は日本を盟主として団結せよ、という主張」⁽¹⁴⁾とする意見である。これは「アジア諸民族の解放」と「日本の盟主的地位」と「日本帝国主義の侵略政策を理論づけ」という三つの要素で大アジア主義の内包を規定する狭義の定義で、その外延は日本を中心としてアジア及び世界の未来像を構想し、侵略・拡張的な彩りを帯びていた「アジア連帯」思想しか含まれていないものである。

その二は、「アジア主義はアジア諸民族、諸国家が団結して欧米列強の圧迫・侵略に対抗しようとする思想あるいは運動である」⁽¹⁵⁾。または「欧米列強のアジア侵略に対して、アジアの団結を図ろうとする主張」⁽¹⁶⁾と見ているものである。この意見はただ「アジア諸民族の団結」と「欧米列強の侵略に対する対抗」という二つの要素で大アジア主義の内包を規定するもので、その外延は割合に広くて、日本近代史におけるほとんどの「アジア連帯」思想を包容できるような広義の定義である。

大アジア主義をめぐる問題の解明に対して、狭義と広義の定義のどちらを選ぶべきかの結論を下す前に、大アジア主義そのものについて、もう少し検討すべきであろう。

大アジア主義の生成・発展のプロセスについて、先ず橋川文三氏の「大アジア主義」についての解説を参考にしたいと思う⁽¹⁷⁾。

「……（前略）明治の初期における民権論と国権論、欧化主義と国粹主義の対立は、日本の膨張主義が生み出したものであり、この風潮のなかから大アジア主義は生み出されたといえる。膨張主義は本多利明の《西域物語》、佐藤信淵の《混同秘策》などに見ることができ、ペリー来航以降には橋本左内や吉田松陰を始めとして多数現れてきた。のちに出現される菅沼貞風の《新日本図南の夢》、東海散士の《佳人之奇遇》、矢野龍溪の《浮城物語》などは對外発展、海外雄飛ものであった。

植木枝盛は自由民権の立場から、アジア諸民族の自由平等を守るべく、欧米に対する抵抗を正当化し、連帯の必要を説き、世界政府論を掲げた。大井憲太郎は、朝鮮の改革と日本の對外進出を関連させつつ、アジア諸国の＜愛国の心＞と＜自治の精神＞の誘起を図ろうとした。また樽井藤吉は、白人の侵略に共同防衛するには、＜各邦の自主自治の政をして、均平に帰せしむ＞日韓の合邦が必要だとした。そして、内田良平は李容九と結んで樽井の説く対等関係としての日韓合邦に尽力した。しかし、その結果は総督政治であり、東亜連邦組織の基礎たりうるものではなかった。岡倉天心は、汚辱に満ちたアジアが本性に立ち戻る姿を＜アジアは一つ＞と言い表し、美の破壊者としての西欧的なものを排斥すべきものとした。宮崎滔天は終始一貫した同情と犠牲的精神をもって中国の革命に尽力した。しかし、このようなさまざまな側面をもっていた大アジア主義も、自由民権の衰退、国家機構の整備、清やロシアに対する軍備拡張の過程でしだいにアジアへの侵略と収斂されていった。＜黒竜会綱領＞には＜天皇主義＞＜軍人勅諭の精神＞＜海外への発展＞が掲げられ、また北一輝は平民社に失望して、中国同盟会や黒竜会に接近した。そしてこれ以降の大アジア主義は、天皇主義とともに、多くの右翼団体に担われ、のちには東亜新秩序、大東亜共栄圏の思想へと結びついていくことになる。……」

この解説によっても分かるように、大アジア主義は形式面から見れば、19世紀20年代にアメリカ大統領だったJ・モンローの提唱した「モンロー主義」やその後に出てきた「パン・アメリカ主義」や「パン・スラブ主義」などとよく似ていた。いずれも李大釗の指摘した「Pan……ism」の延長線上にあるものである。またその目標の面から見れば、モンロー主義が「アメリカはアメリカ人のアメリカ」の旗印を掲げ西半球におけるヨーロッパの勢力を駆逐して、ラテン・アメリカを独占しようと企てていたこと、「パン・スラブ主義」がオーストリア・ハンガリー二重帝国やトルコの統治下から「スラブ同胞を解放しよう」との名義を立てて、ロシア帝国の指導下にスラブ民族を統一しようと企てていたのと同じく、大アジア主義も「アジアはアジア人のアジア」というスローガンを掲げながら、日本帝国主義のアジア進出を正当化する性格を持っていたものと言うことができる。この意味においては、大アジア主義が侵略・拡張的な思想、或いは主張だと言で断定することも可能であろう。

しかし、アジアの国の一つとしての日本の、その近代史上における地位と運命は、アメリカやロシアと完全に同じものではなかった。したがって、大アジア主義も決してモンロー主義やパン・スラブ主義の単純な模写ではなく、やはり次のような二つの他とは異なる特色を持っていた思潮であった。

1、日本近代史の第一ページは他人を侵略する歴史ではなく、他人に侵略されそうになった歴史である。

大アジア主義の中核になる「アジア諸国・諸民族の連合」という考え方が生まれることができたのは、日本が19世紀の中葉、中国などのアジア諸国とほぼ同時に欧米資本主義列強の脅威にさらされたからである。アジアの大同団結によって、欧米の侵略勢力を追い出そうという願いは、確かに最初の大アジア主義者や自由民権派の一部の人々の真心を込めた希望であった。その後、日本の国力の向上に伴って、植民地化の危機は乗り越えられたが、80・90年代になっても、欧米に対する警戒心は日本人の中にまだ広く残っていた。そのため、欧米のアジア侵略に対する反撥的心理やアジアの弱小国への同情心と連帯感がアジア認識と繋がっており、これこそ、最初の段階における大アジア主義がモンロー主義・パン・スラブ主義と異なっていた点である。そして、それだからこそ、大アジア主義が最初にはほかのアジアの国々にも反響を及ぼしたのである。それは、後に大アジア主義はだんだん日本帝国主義のアジア侵略の道具となり、アジア諸国からの反対や呪詛の声を浴びた状況とは明白に異なっており、この点は看過してはならないところである。

2、大アジア主義は混然一体たる思想システムではなく、整然とした「思想」や「理論」というより、むしろ多種多様な流派あるいは趨勢を包容している思想的複合体である。樽井藤吉・大井憲太郎らの朝鮮・中国進出の思想は自由民権派の持論と違っているし、岡倉天心の「アジア文明論」は近衛篤磨の「同文同種論」と同一に視ることもできず、同じ玄洋社―黒竜会系の大陸浪人たちの主張も千差万別である。それにも関わらず、彼らは皆「アジアの連合」や「アジアはアジア人のアジア」にしようという思想的最大公約数をもっていたのであって、その結果大アジア主義もかなり乱雑な社会思潮にならざるを得なかった。特にその醗酵の段階において、この乱雑性という特色が最も際立っていたが、のちには、大アジア主義はショービニズムと拡張主義の道に沿って直進し、遂に「日本帝国主義の侵略政策を理論づける主張」に成り下がったのに過ぎないと思う。本論文が大アジア主義をただの思想や主張ではなく、一種の社会的思潮として見なしているのは、こういう考えに基づいているからなのである。

以上の分析に基づけば、大アジア主義の内包については、やはり広義の定義を採用する方がより適当であろうと思われる。つまり、大アジア主義の内包を「アジア諸民族の団結」と「欧米列強のアジア侵略に対する対抗」との二つの要素に絞っている見の方が、大アジア主義思潮そのものの発展・変遷をより深く、より全面的に研究する上で有効であり、大アジア主義の歴史における位置づけの上でもよりふさわしいものである。

(2) 思潮としての大アジア主義

思潮として、大アジア主義は雑然としていながらも、いくつかの共通性を持っていた。

まず、「アジア」に対する認識である。

「アジア」と言えば、ふだんは単純な地理的な概念として使われる場合が多い。しかし、当時の大アジア主義者のアジアに対する認識はそれより深かった。「アジア」という言葉が、欧米資本主義諸国のアジアへの侵略や拡張と共に伝来したもので、我々がアジア人だと分かるようになった時には、アジアにおけるほとんどの国はすでに欧米列強の植民地或いは半植民地に化していたのである。アジアはまさに悲劇的な存在だった。インドや中国のような悲惨な状態にまではなったことはないけれども、日本人々にとって、アジアといえば、悲しい民族と悲しい国の集合と等しい。アジアはしだいに「非ヨーロッパ」、「非欧米」という意味を持つようになり、常に「ヨーロッパ」、「欧米」の反対語として使われることになった。アジアとヨーロッパの関係において、ヨーロッパは侵略者・征服者であって、アジアは被侵略者・被征服者であった。「ヨーロッパの栄光は、アジアの屈辱である」⁽¹⁸⁾という、大アジア主義の創始者の一人である岡倉天心のこの名言は、すでに簡潔かつ深刻的にアジアとヨーロッパとの対立的な関係を総括した。そのため、19世紀の末、20世紀の始め頃に、人々の口の端によくのぼった「アジア」という言葉は、ただ地理学的概念ではなく、極めて豊富な政治的な色彩をもった概念であった。これは、大アジア主義の如き思想をもっていた者の欧米諸国に対する共通な反撥心理の反映である。

欧米の侵略に対する反撥心理と表裏を為しているのは、アジア諸国への連帯感である。しかし、一口にアジアと言っても、その具体的地域はアジアの全域を指すのではなく、アジアの一部だけを指している場合が多い。大体、大アジア主義者にとって、アジアといえば、おもに東アジア地方、特に日本、中国、朝鮮の三国のことを指していたのである。この意味において、「アジア」と「東洋」は同位的な概念である。「東洋の新局面」という論文の中で、「東洋」について、陸羯南は次のように述べている。

「東洋の西南は既に欧人の侵蝕に任かしたり。今は東洋といへば唯だ日清韓の三邦を余すのみ。即ち世界大観の上よりせば、諸強国に頻に啄を向ける東洋には我が日本帝国も包含せられぬ。東洋といへる組の上には三邦皆共に臚列されて、之に料理を試んとするは唯だ欧米諸国なり。」⁽¹⁹⁾

この欧米諸国即ち「西洋」の対立物として存在している「東洋」はもちろんアジアのことであり、しかも「日清韓の三邦」を主役として扱っていたのである。陸羯南のような言い方はその当時にはあまねく流行していたらしい。日本・中国・朝鮮のほか、フィリピンやベトナム、インドを加えてアジアのことを論ずる人もあったが、西アジア諸国や中央アジアをも一括して論ずる人は非常に少なかった。

なぜ「アジア」はこんなに狭くなったのか？これは当時のアジアにおける国際環境がもたらした結果である。19世紀後半のアジアでは形だけでも独立的な地位を辛うじて保っていた国は、日本、中国、朝鮮しかなかったのである。明治13年3月24日『東京横浜新聞』に載ったある論説には、「夫れ亜西亜の版図大なりと雖北方全部は既に魯の有となり南方亜西亜其邦国を列举せば其数多しと雖未た一国独立の主権を有する者あるを聞かずビルマ安南シャムの如き英仏二国の為めに一国の主権を左右せられ印度地方は凡て英国の為に蚕食せられペルシャ国が境土も近年英魯二国の注目する所となる今日の位置を失ふこと最早遠きにあらざる可し僅かに独立の地位を存し歐洲強国に力を抗せんとするの勢ある者は支那朝鮮日本あるのみ而して朝鮮とても版図狹隘人心振はず若し鄂羅（ロシア）一たび南向の志を起こさば朝鮮の独立も一朝の間にして覆滅するなる可し故に東方諸國中支那日本を除かば他に独立国にして云ふも可なる者あり歐洲強国か東方辺海を横行するも偶然にあらずと云ふ可し」⁽²⁰⁾と述べている。このように、東・西両側の矛盾の焦点となった「支那朝鮮日本」の「三邦」がアジア・東洋の代表になるのはもっともなことであって、大アジア主義者たちにアジア復興の基地或いは要と見なされて、いろいろな希望を掛けられるのも不思議なことではなかった。欧米諸国のアジア侵略という危機に直面しなければならない共通の運命は、アジアへの連帯感を生み出す基盤であった。

この問題に関連して、ついでに触れたいものは、福沢諭吉のアジア認識である。彼もよく「アジア」という言葉を使っていたが、その使い方は他とは異なったもので、なんと日本自国を除外して「アジア」を扱うのである。福沢諭吉の考えでは、日本と中国・朝鮮とはただ地理上に隣接している関係に過ぎず、「文明」の面から視れば、全く同列には論ずべからざる国柄である。「文明国」の境に入った日本は、既に非文明的「東洋」の成員ではなく、文明的な「西洋」グループのメンバーになったのである。「脱亜論」という発想は、ここから出発した主張である。しかし、アジアとの連帯を切断しようとした脱亜論が、後になって、大アジア主義の生成とその発展に対しても影響を及ぼしたのは不思議な関係である。

次に、思想史の見地から、ある時代特定の思潮として大アジア主義を検討すると、大アジア主義は以下の二つの特色を持っていたことが分かる。

1、全体的にいえば、大アジア主義の主な内容が欧米勢力に対する抵抗とアジア諸国に対する連帯感との二点に集中していることは言うまでもないが、その具体的な方法・手段・目的及びアジア諸国に対する感情的愛着などの点では、人によってさまざまな様相を呈している。例えば、佐藤信淵と会沢安の二人は、ほぼ同じ時代に大アジア主義らしき思想を公言したが、会沢は「満清」と連絡して「謀を伐ち交を伐つ」の計を施すべきだと主張したに対して、佐藤が『混同秘策』の中に「支那を取って」、「世界を混同」すべきだと言った。この佐藤信淵本人でさえ、時間の経つにつれて、アジアに対する態度も「征伐」から「提携」へと激

しく変化してきたのである。これはアジアに対する基本的態度の上での違いだと言えよう。自由民権主義の立場からアジアの未来を構想していた植木枝盛と宮崎滔天の場合、原則は同一だと言っても構わないが、各々の手段についての主張はやはり大分違っている。同じ「日韓合邦論」を唱えている樽井藤吉と内田良平の間でも、政治的立場のせいであろうが、その合邦という目標に対する理解も完全に一致するものではなかった。内田良平の中国及び中国ブルジョア革命に対する見方と態度にも、前後にかなり大きな変化があった。さまざまな変化によって、大アジア主義者たちの政治的立場も絶えず変化しつつあったわけである。このような変化を引き起こした内在的原因は、承継関係に乏しい大アジア主義自身の性格にあり、外在的原因は19世紀以来の、日本の国際的地位と中国の政治的局面の変化にあると言える。本来、理論的基盤が弱かった大アジア主義は、「西力東漸」という国際関係のもとでの産物であり、国際関係の変化に従って変化するのも別に不思議なことではないであろう。

これは、内容の変化しやすいという大アジア主義思潮の一つの特色である。

2、大アジア主義は理論的基盤の弱い思潮であって、理論の面から見れば、その主張の大半は、東アジアにおける国際情勢への感慨や考え方や希望のようなものであって、経済・政治・軍事の力関係を分析した上で冷静かつ科学的に大アジア主義を理論的な基盤の上で構想しようとした人は少なかった。思想の反芻と止揚によって理性的認識に至る面が欠けていた大アジア主義は、人を説得して大アジア主義へ帰依・賛同させるために、しばしば民主主義・ナショナリズム・ショービニズム・軍国主義などのような政治論理と結びつかざるを得なかった。これらの論理は大アジア主義にとって、付着しやすい基盤であった。大抵の大アジア主義者は、もとより単純な大アジア主義の持ち主ではなく、さまざまな政治的立場から出発して大アジア主義式の思想に至った場合が多かったので、大アジア主義と彼らのもとの立場の間は、実際には切っても切れぬ関係であった。この場合の大アジア主義は思想や主張というより、むしろその思想と主張の実現のための手段・方法として使われているものだと言える。ゆえに、その持ち主本来の持論の違いによって、大アジア主義も自由民権主義的・国権主義的・天皇主義的などのさまざまな形をとって現れた。手段・方法として大アジア主義の性格を把握することは、大アジア主義の研究にとってむしろ最も重要なポイントであろうと思う。

形式での多様性と、他の政治論理に容易に溶け込んでしまうという融合性が、大アジア主義思潮のもう一つの特徴である。

大アジア主義にはいろいろな形式があったことは事実であったが、その欧米勢力に対する抵抗及びアジアへの連帯感という基本的な内包は余り変わらなかった。違っていたのは、どのように欧米の勢力を放逐して、どのようなアジアの連合を達成しようとしたかということ、つまりその手段と方法の面にある。この手段と方法の選択の違いによって、19世紀末以来の大アジア主義はおよそ二つの類型に分けられる。アジア諸国・諸民族が平等・自主の原則のもとで助け合い、アジアの団結を確立し、それによって欧米勢力をアジアから追放しようとするのが、民権主義的或いは民主主義的大アジア主義であり、日本が武力を奮って「八紘一宇」の理想のもとに、アジア諸国を一丸とすることにより、欧米に代わって日本のアジア支配を作ろうとしたのが、国権主義的或いは軍国主義的大アジア主義である。

民権主義・民主主義と国権主義・軍国主義の両者はかなり離れており、大アジア主義と関連して同列に論じる時には、上述のような面倒な先行作業をやらねばならない。そのため、民権主義・民主主義的な大アジア主義を「アジア連帯主義」・「新アジア主義」・「アジア型大アジア主義」と呼び、国権主義・軍国主義的な大アジア主義を「大アジア主義」・「大日本主義」・「日本型大アジア主義」と呼んで、名称の上から両者を区別しようとする意見も出ている⁽²¹⁾。しかし、そうすると、両者の間に存在しているいくつかの共通な特色及び互いの影響や関連までも切り裂かれる恐れもある。大アジア主義思潮の流れを解明する上で欠くことのできない糸口であるこの影響・関連関係を視野に入れるべきと思われるので、私はやはり以前通りに大アジア主義を一つの総体として把握し、そして主に類型分析の方法を通じて研究を展開したいと考えている。

大アジア主義者は大陸浪人だけに限らないが、大陸浪人のなかに大アジア主義者は多かった。しかし、軍部系に属していた大陸浪人には大アジア主義者は比較的少なく、彼らの多くは陸軍首脳の指令に従って、明確な軍事目的のもとに中国での活動を行った場合が多いので、大アジア主義者というよりは軍国主義者や拡張主義者と呼ぶ方が適当であろうと思う。これに対して、玄洋社系（黒竜会・東亜同文会などの団体を含む）に属している大陸浪人のなかでは、大アジア主義者の比率は軍部系より遥かに多かった。その上、彼らの中には民権主義的大アジア主義者もいるし、国権主義者的大アジア主義者もいた。大アジア主義者の理想に基づいた彼らは、思想家でもあり、実践家でもあった。彼らの思想と活動は、辛亥革命時期における中日関係史の中の最も注意すべき一ページであると言ってよいであろう。

〈注〉

- (1) 孫文「建国方略」、『孫中山全集』（北京・中華書局）第6巻，p.232-233. 日本語訳は伊地智善継・山口一郎監修『孫文選集』第2巻，社会思想社，1987年，p.139に参照した。
- (2) 馮自由『革命逸史』第3集，p.38.
- (3) 同上，p.48.
- (4) 同上，p.50.
- (5) 高柳光寿・竹内理三編『日本史辞典』角川書店，昭和53年，p.588.
- (6) 『日本大百科全書』14，小学館，昭和62年，p.596.
- (7) 渡辺龍策『近代日中民衆交流外史』雄山閣，昭和56年，p.588.
- (8) 渡辺龍策『馬賊頭目列伝』秀英書房，1983年，p.167.
- (9) 黒竜会『東亜先覚志士列伝』中巻，原書房，昭和41年，p.178.
- (10) 同上，p.188, 196-197.
- (11) 川島浪速「歩-韓愈山石歌韻-」，前掲『東亜先覚志士列伝』中巻，p.225.
- (12) 人民出版社『李大釗選集』p.127.
- (13) 高柳光寿・竹内理三編『日本史辞典』p.569.
- (14) 野原四郎「大アジア主義」，『アジア歴史事典』平凡社，1971年，p.6-7.
- (15) 藤井昇三「孫文の『アジア主義』」，辛亥革命研究会編『中国近代史論集 菊池貴晴先生追悼論集』汲古書院1985年，p.414.
- (16) 橋川文三「大アジア主義」，『大百科事典』第8巻，平凡社1985年，p.1148-1149.
- (17) 同上，p.1148-1149.
- (18) 岡倉天心「東洋の目覚め」，『日本の名著39・岡倉天心』中央公論社，昭和45年，p.70.
- (19) 西田長寿・植手通有編『陸羯南全集』第4巻，みすず書房，1970年，p.580-582.
- (20) 岡義武「明治初期の自由民権論者の眼に映じたる当時の国際情勢」，明治資料研究連絡会編『民権論からナショナリズムへ・明治史研究叢書』御茶ノ水書房，1978年，p.45.
- (21) 上村希美雄「戦後史の中のアジア主義—竹内好を中心に—」『歴史学研究』第561号1986年11月，p.41-42.